

霧島山（新燃岳）の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

＜火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）が継続＞

本日（5月2日）午前、航空自衛隊新田原救難隊の協力を得て行った上空からの調査では、火口内に蓄積された溶岩は、前回（4月28日）と比較して大きな変化はありませんでした。

4月18日19時22分の噴火以降、噴火は発生していません。

【防災上の警戒事項等】

新燃岳火口から概ね 3 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石や火砕流に警戒が必要です。

風下側では降灰及び遠方でも風に流されて降る小さな噴石（火山れき）に注意が必要です。これまでの噴火では、風に流されて直径 4 cm 程度の小さな噴石（火山れき）が新燃岳火口から 10km を超えて降りました。また、爆発的噴火に伴う大きな空振に注意が必要です。噴火警報等及び霧島山上空の風情報に注意してください。

降雨時には泥流や土石流に警戒が必要です。降雨に関する情報に注意してください。

○活動概況

・上空からの調査（図 1、2）

本日（5月2日）、航空自衛隊新田原救難隊の協力を得て行った上空からの調査では、火口内に蓄積された溶岩は、前回（4月28日）と比較して大きな変化はありませんでした。白色噴煙は、主に溶岩縁辺の北側および東～南東側から、火口縁上 100m 程度上がっていました。

赤外熱映像装置¹⁾による観測では、前回（4月28日）と比較して地表面温度分布に大きな変化はなく、火口内に蓄積された溶岩の縁辺が高温でした。

・地殻変動及び地震・微動の発生状況（図 3）

5月1日04時頃から、傾斜計で新燃岳側のわずかな隆起の変化が認められ、1日20時頃からは火山性地震もやや増加しましたが、噴火は発生せず、1日23時21分の火山性微動発生後に、傾斜変化は沈降に転じ、隆起変化以前の状態に戻りました。また、火山性地震も2日02時頃には減少しました。

1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。



図 1 霧島山（新燃岳） 火口内の状況

- ・ 火口内に蓄積された溶岩に大きな変化はありませんでした。
- ・ 白色噴煙は、主に溶岩縁辺の北側（図中の赤丸）および東～南東側（図中の白丸）から火口縁上 100m 程度上がっていました。

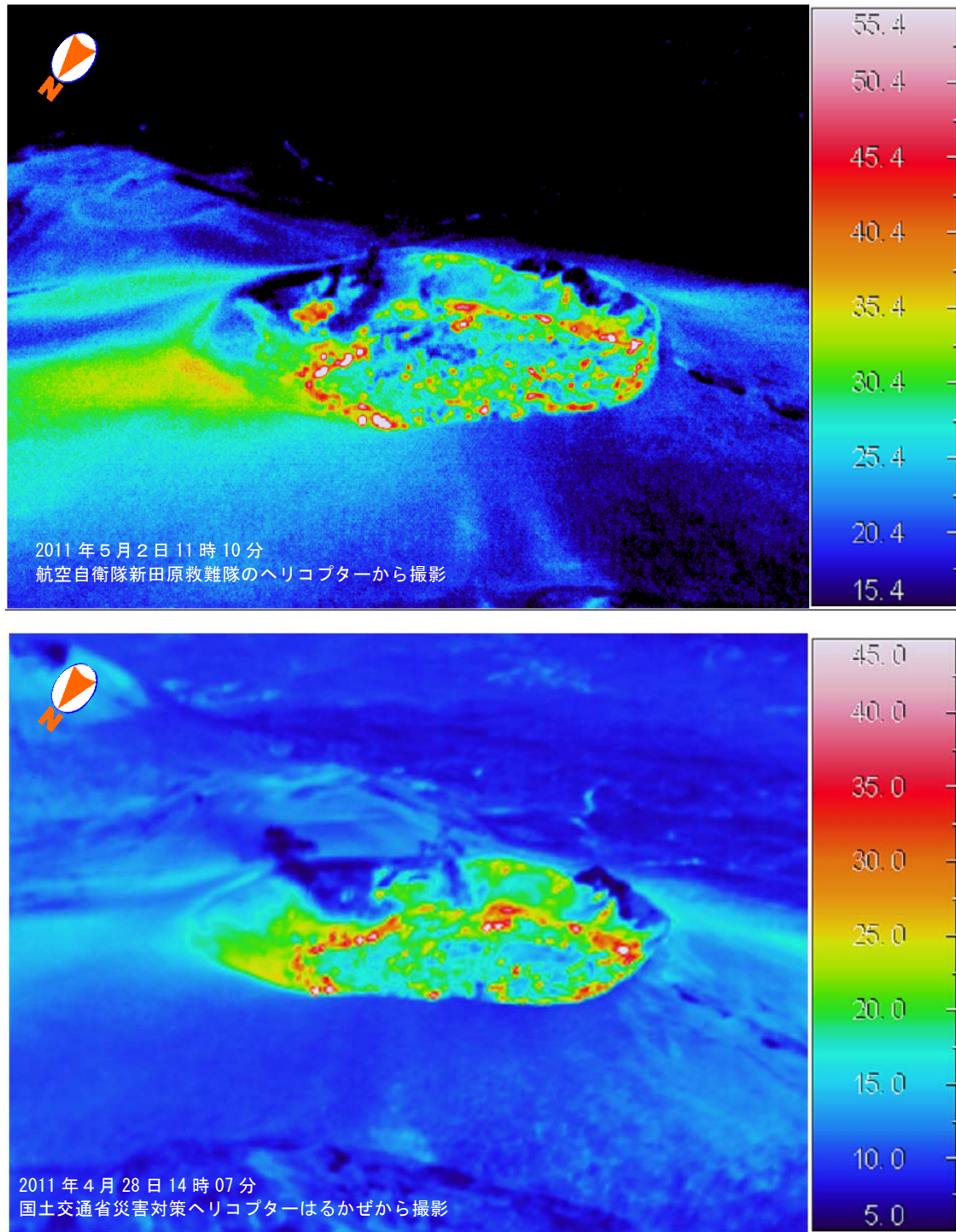


図 2 霧島山（新燃岳） 赤外熱映像装置による火口付近の地表面温度分布

赤外熱映像装置による観測では、前回（4月28日）と比較して地表面温度分布に大きな変化はなく、火口内に蓄積された溶岩の縁辺が高温でした。

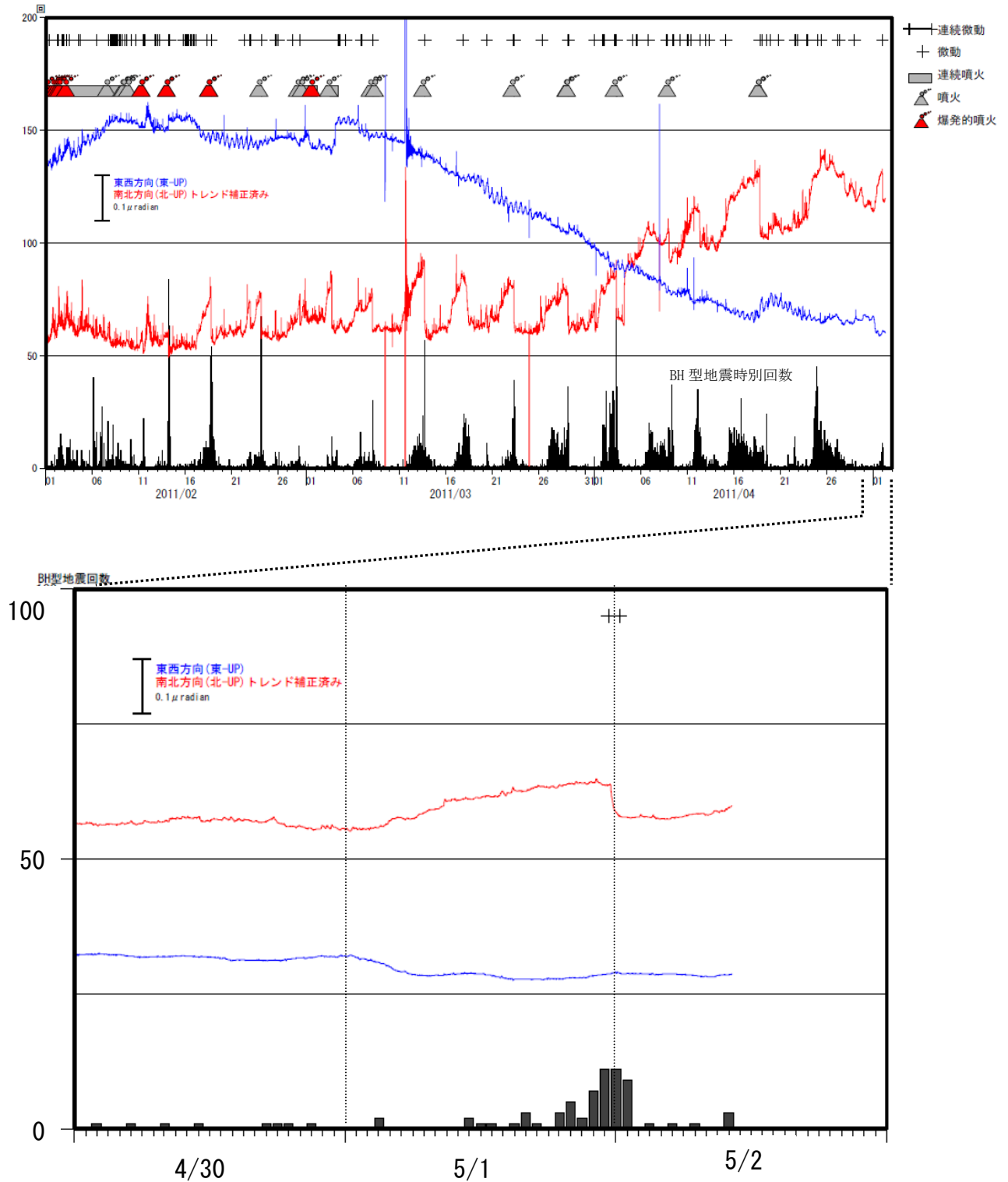


図3 霧島山（新燃岳） BH型地震²⁾の時間別回数と高千穂河原傾斜計の変化
(2011年2月1日00時00分～5月2日12時00分)
1日04時頃から新燃岳側のわずかな隆起が認められていましたが、噴火は発生せず、1日23時頃沈降に転じ、隆起変化以前の状態に戻りました。

2) 火山性地震のうち、火口直下の比較的浅い場所で発生し、周期の長い地震をB型地震と呼びます。B型地震は、マグマの通り道（火道）の中で、マグマやガスが移動したり、マグマが発泡したりすることで発生すると推定されています。B型地震のうち、比較的周期が短いものをBH型、長いものをBL型と分類しています。